

# 外国語としてのフランス語教育およびケベックの文化と 社会に関する研修への参加報告

Rapport du Stage en didactique du français, culture et société québécoises

上江洲律子  
UEZU Ritsuko

## はじめに

2013年の夏は、現在、その教育に携わっているフランス語という言語が、世界の中で英語に次ぎ、多くの国で公用語として使用されている言語であることを改めて実感することになった。というのも、機会を得、北アメリカ大陸において、フランス語を唯一の公用語とする州、カナダのケベック州で開催された教員研修に参加を果たしたからである。本稿は、その研修に至った経緯および研修の内容、そしてその研修の成果を盛り込んだ授業の実践の報告を目的とする。

この度参加した「第34回外国語としてのフランス語教育およびケベックの文化と社会に関する研修」は、ケベック州政府の主催により、同州に位置するモントリオール大学で、2013年7月29日（月）から2013年8月16日（金）までの3週間実施された。参加者は最終的に、日本から7名、韓国から3名、ラオスから2名、カナダの英語圏から5名の計17名であった。少人数で構成された研修であったため、最終課題となるグループ活動では、全員がフランス語での模擬授業を実践することができた。参加者それぞれが自らの指導方法を客観的に評価してもらう場となったと同時に、日本、韓国、ラオス、カナダという4つの国におけるフランス語の指導方法の傾向をお互いに体感する機会となった。

ところで、このケベックにおける海外研修に先立ち、日本フランス語フランス文学会と日本フランス語教育学会は、在日フランス大使館と連携して、フランス語教育に関する国内研修を実施した。私自身も含めた数人は、その国内研修を経て、フランスやケベック州といったフランコフォニー（フランス語圏）で実施される海外研修に参加することとなった。その点を考慮し、まず、国内研修の概要を伝えた後に、海外研修についての報告を行いたい。

## 1. 研修報告

### 1) 国内研修

国内研修は、2013年3月23日（土）から2013年3月26日（火）まで、参加者20名を対象に4日間の集中研修として東京日仏学院で実施された（プログラムについては資料の表1を参照）。この研修の目的は、「言語教育に関わる分野を概観し、フランス語教授法および教育技能について基礎知識を習得する<sup>2)</sup>」というもの

<sup>1)</sup> 髭郁彦、川島浩一郎、渡邊淳也『フランス語概論』、駿河台出版社、2010年、35-37頁。

<sup>2)</sup> 日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館「2013年フランス語教育国内スタージュ募集要項」、2012年11月8日、1頁。

である。また、ヨーロッパでは、欧州連合のスローガンである「多様性の中の統合」を目指す過程において、多言語主義<sup>3)</sup>を実現するべく、2001年、言語政策の柱の一つとして「ヨーロッパ言語共通参照枠<sup>4)</sup>」が打ち出された。そのことに着目し、国内研修では、最初に、「ヨーロッパ言語共通参照枠」についてフランス語教員として知っておくべき主要なポイントを確認した後（「ヨーロッパ言語共通参照枠」の概要、外国語としてのフランス語教育の変遷など）、外国語としてフランス語を教えるという観点から、教授法（発音、文法、文学など）や教育技能（授業の組み立て、学習者との関わり方、評価の方法など）についての基礎知識を学んだ。そして、研修の前に実施された授業見学（授業見学が困難な場合は、その授業を撮影したDVDを通して授業見学を実施）を参考にしながら、授業において学んだことを実践的に確認するべく、授業と並行して、1グループ4名の5グループに分かれ、グループごとに模擬授業の準備をし、研修の最後にグループごとにフランス語での模擬授業を実践した。

この研修を通して常に留意されたことは、「ヨーロッパ言語共通参照枠」においても明確に掲げられた授業の実践であった。いわゆる学習者が主体的に取り組むことができる授業の実践である。言葉を換えると、この研修では、教育の「場」の中心に学習者を位置づけ、学習者が主体的に取り組むことができる授業の実践を目的として、授業の準備の仕方や、実際の授業の進め方の手順、また、学習者との関わり方や、評価の仕方などを学んだ。つまり、自ら学ぶ学習者を育成するための様々な取り組みに触れる機会となったと言えるだろう。ちなみに、このような学習姿勢は生涯学習へとつながる可能性を多分に有する。生涯学習への誘いという観点からも、このような授業を実践するべく、今後積極的に取り組んでいきたい。

また、授業を担当した講師の一人、ピエール＝イヴ・ルーは、教員それぞれが実際に対峙している学習者に適した教授法を模索することの必要性を語る一方で、既に身につけた教授法に拘泥することの弊害を指摘しながら「多様な教え方があることを受け入れる必要がある」と述べた。まさに「多様性の中の統合」を体現する言葉だと見なすことができるが、その言葉の通り、たとえ主体的に学ぶ学習者の育成という同じ目的に取り組んだとしても教員の観点はおのおの異なる。しかも、学習の動機を初め様々な面において異なる学習者の観点に従えば、教え方に差異が生じることは自明の理である。東京日仏学院で過ごした4日間は、自身の教え方を常に検討し続けることの必要性を改めて痛感するときとなった。補足となるが、実際、その国内研修自体が、事前の授業見学も含め、研修の目的を達成するために入念に準備され、また、ダイナミックに進められていた。複数の教員が異なる主題で授業を展開しながらも、それぞれの授業が互いに連携しつつ研修全体として統一的に構築されていたことに強い感銘を受けた。

<sup>3)</sup> 「多言語主義」の原語は« plurilinguisme » 「プリュリランギュイスム」であり「複言語主義」とも訳される。しかし、ここでは以下の資料を参照して「多言語主義」と訳した。武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科編「ヨーロッパ多言語主義の可能性—現代ヨーロッパの言語事情」、『ヨーロッパ学入門—改訂版—』、朝日出版社、2009年、113-143頁。ウェブ雑誌：「EU 質問コーナー：EUはどのように文化の多様性を維持しているのですか」、雑誌『ヨーロッパ』、2006年冬号、15頁（閲覧日：2014年1月11日）。

<sup>4)</sup> ウェブ書籍：吉島茂、大橋理枝訳編『外国語教育Ⅱ—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』（PDF）、朝日出版社（閲覧日：2013年12月1日）。

## 2) 国外研修

### a) 研修プログラムの概要

上記3月の国内研修を経て、同年7～8月にモントリオール大学で開催された国外研修に参加することとなった。その研修プログラムは、ラヴァル大学とモントリオール大学の語学学校によって提供されたものであり、下記3つの側面を内包するものであった<sup>5)</sup>。

教育的な側面 : ・理論的な解説

- ・教育法の取得
- ・学習戦略の実践
- ・新しいテクノロジーの活用
- ・外国語としてのフランス語のクラスについての考察

言語学的な側面 : ・音声の修正

- ・読解
- ・協働作業
- ・記述文書の作成
- ・ケベックで話されているフランス語への入門

文化的な側面 : ・ケベックの歴史

- ・ケベックの文学
- ・童話や伝説、踊りへの入門
- ・ケベック映画の鑑賞
- ・教育学的、文化的、社会的な観点に留意したガイドつきの見学

これら3つの側面を実現するために、研修のプログラムは、教育に関わるアトリエ形式の授業や文化に関する講義、ケベック州の歴史を色濃く残した場所の見学という3つの部分によって構成されていた。そのそれぞれについて確認していく。

### b) 教育に関わるアトリエ形式の授業

午前には主に、1名の教員（ヴィルジニ・ドゥブリ、フランス出身でモントリオール大学教員）の指導の下、「ヨーロッパ言語共通参照枠」を前提とした教育に関わるアトリエ形式の授業（参加型の授業）が実施された（このプログラムについては資料の表2を参照）。この授業が海外研修の中心となる。参加者には授業へ出席することは勿論、研修の最初に配付された論文集から当日の授業内容に関わる論文を取り上げて熟読した上で出席することが義務づけられた。そして、授業では、教員によって解説される教育理論などを学ぶとともに、教員と参加者の間あるいは参加者同士の間で討論が展開された。

<sup>5)</sup> ケベック州政府による募集要項参照、Gouvernement du Québec, « Bourses offertes aux professeurs de français langue étrangère, Japon et Corée du Sud : Programme de Stage en didactique du français, culture et société québécoises ».

また、授業で学んだことについて実践を通して確認することを目的に、教員から 2 つの課題が提示された。第 1 の課題は、実資料（教育用に編集されていない資料）を教材とした「聞き取り」を主題とする個人課題である。参加者は、自身が設定したクラス（「ヨーロッパ言語共通参照枠」に従ったレベルの設定や、年齢層、教育機関やクラスの構成人数などを設定）に適した教材として実資料を選択した後、「聞き取り」の授業の実施計画書を作成して提出した。第 2 の課題は、同じく実資料を教材とした「読解」を主題とするグループ課題である。参加者は 1 グループ 2～3 名の 6 グループに分かれ、個人課題と同様、グループで設定したクラスのための実資料を選び出して授業の実施計画を作成した後、実際に模擬授業を行った。

そして、研修全体の評価はこの授業を通して行われた。評価基準は次の通りである。

評価（100%）＝個人課題（40%）＋出席（10%）＋グループ課題（40%）＋参加状況（10%）

また、個人課題やグループ課題に関しては、詳細な評価基準が課題の提示とともに公表された。しかも、課題準備の過程や課題の提出時に教員から不備あるいは不明な点に関する示唆があり、参加者は修正しながら授業の実施計画書の作成や模擬授業の準備を進めることができたことが印象的であった。

#### c) 文化に関する講義

午後の授業では、カナダにおいて特異な特徴を有するケベック州の文化的な側面に焦点が絞られて、次のような講義が実施された。

- ・ケベックで話されているフランス語（担当：クロード・ティモン）
- ・ケベックの文化的な活力（担当：ブルーノ・ロンフェール）
- ・ケベックの歴史（担当：ジル・ラポルト）
- ・第二外国語としてのフランス語および外国語としてのフランス語の教育に役立つ教育テクノロジー（担当：ジャン＝マルセル・モルラ）
- ・ケベックの間文化主義や社会的に賭けられているもの（担当：サナ・サブニ）
- ・ケベックの童話と伝説（担当：エリック・ミショー）

上記に示したように、文化に関する講義は、言語や文化、歴史やテクノロジー、文学など、様々な主題をそれぞれ専門の講師が担当するオムニバス形式で展開された。

特に印象に残った講義は、まず、「ケベックで話されているフランス語」である。この講義では、いわゆる標準のフランス語とケベックのフランス語の差異の要因についての解説が行われた。ちなみに、ケベック州ではフランスの植民地時代となる 17－18 世紀のフランス語が保持されている。その結果、現代のいわゆる標準のフランス語との間に差異が見られることになるが、この講義では、しばしば指摘されるその歴史的な要因の他に、地域性や官職名の女性化、英語化など、その他の要因について学ぶことができた。さらに、日本で視聴可能なフランス語のテレビチャンネル（TV5 monde）を通して耳にしていたケベックのフランス語の発音の特徴を概観することもできた。

また、コンピュータ室でインターネットを活用しながらアトリエ形式で実施された「ケベックの文化的な活

力」も非常に興味深いものであった。この講義では、まず、講師からケベックを象徴する特徴として4つの主題（モンリオール、冬、世界との関わり：移民、フランス語）が提示された。そして、ランダムに組まれたグループごとに、講師が提供する複数のインターネットのサイトを参照しながら、指定された主題に関して調べることを通して、ケベックの特徴についての考察を行った。その後、グループを組み直し、新しいグループでそれぞれが調べたことをもとに、4つの主題について改めて語り合った。講義の最後には、グループごとに特に印象に残った主題についての発表を行い、参加者は「ケベックの文化的な活力」に関する互いの意見を共有しあうこととなった。このようにグループを組み直しながら討論を展開していく授業手法や、この講義で紹介された数多くのインターネットサイトは、今後の授業にとって参考になった。

文化に関する講義の中で最後に実施された「ケベックの童話と伝説」では、実際に語り部を職業とする人物が講師を務め、参加者はケベックにおける伝統的な童話と伝説の紹介を聞きながら、語り部の実演も鑑賞することができた。その際、講師によってあらかじめその概要を伝えらえた後に、小さな手風琴のような独特の楽器の演奏を伴いつつ、普段聞きなれたフランス語とは異なるフランス語で語られる物語は、言語を通じた文化の活力ある広がりや変貌、いわゆるフランコフォニー（フランス語圏）の魅力を感じさせてくれた。

#### d) 見学

モンリオールおよびケベック州の州都であり世界遺産に認定されたケベック・シティーにおいて、教育的、文化的、社会的な観点に留意したガイドつきの見学が実施された。訪れた場所は複数に渡るが、ケベック・シティーの訪問を初め、モンリオール旧市街の散策や、モンリオールの考古学博物館の見学など、企画された見学は一貫してケベック州の起源となるフランスの植民地活動をたどるものであった。このような見学を通して驚きとともに確認したことは、ケベック州においてその起源が非常に肯定的に受容されているということである。それは、ケベック州の旗にフランスのブルボン王朝のシンボルであるユリの花が掲げられ、州の紋章には「私は忘れない」という言葉が刻まれていることの意味を改めて実感させられるときとなった<sup>6)</sup>。また、実際的な情報を提供する目的で、教育関係の書籍や玩具などの教材を扱う専門的な書店の紹介も行われたこともつけ加えておく。

## 2. 帰国後の実践

### 1) 語学教育の側面

一連の国内および国外の研修を通して学んだことは、主に、学習者が主体的に活動することができる授業の構成と運営を実施することと、そして、それを実現するために念入りに準備するということの重要性である。このような授業に対する取り組みは日々の営みにおいて継続的に行われる必要があるが、その一端として、まず、国外研修で提出した個人課題となる「聞き取り」の授業の実施計画書に従った授業を行った。対象となるのは、現在、沖縄国際大学で担当しているフランス語の中級クラス（フランス語IV、フランス語学習年数1年

<sup>6)</sup> 小畑精和、竹中豊編著『ケベックを知るための54章』、明石書店、「エリア・スタディーズ72」、2009年、14頁。

6か月、登録者15名)となる。

a) 準備

まず、フランス語ⅠからⅢまでの間に学習者が学んできた語彙や文法を考慮して、「聞き取り」のための実資料を選択した。その際に活用したのが、国外研修で紹介されたインターネットサイト Audio Lingua <http://www.audio-lingua.eu/spip.php?article379> である。このインターネットサイトでは、フランス語を含む10言語に関して、それぞれの言語話者のモノログがアップされており、言語別、レベル別、性別、年齢別、収録時間の長さ別、主題別にモノログを選択することができる。学習者に適した実資料を選択する上で有用なインターネットサイトだと言えるだろう。今回は、初心者レベル(「ヨーロッパ言語共通参照枠」ではレベルA1)で食べ物についての好悪を語る大人の女性のモノログ(約35秒)を選択した。そして、選んだ実資料を転記した後、授業で既に学んだ語彙とそうでない語彙を分け、さらに後者については、事前に紹介する必要があるものと音声からの予想が可能なものに分けた(教員用の資料)。

b) 授業

授業は、「聞き取り前」と「聞き取り」、「聞き取り後」の3つの段階に従って実施した。それぞれの段階の概略は次の通りである。

まず、「聞き取り」の準備となる「聞き取り前」では、最初に、課題となるモノログのタイトルを示して(板書)、語られる内容に関する学習者の推測を促しながら主題へと導いた。漠然としながらも内容についてのイメージを共有したところで、モノログの主要な要素となる好悪の表現(動詞表現)および食べ物の語彙(名詞)について学習者の記憶を喚起しながら復習を実施した。ただし、固有名詞など、まだ授業では学習していない語彙については知識の有無を学習者に確認した後、必要に応じて映像などを用いて紹介を行った。その後、実践的な復習を目的に、1グループ2~3名に分かれて、それぞれの食べ物の好悪について話し合ってもらった。

次に、「聞き取り」では、一度目の「聞き取り」の後、「聞き取り前」に推測したイメージと実際の内容とを比較しながら一致している点とそうでない点についての確認を行った。このようにモノログの全体像に触れた後、二度目の「聞き取り」では、好悪の表現(動詞表現)に限定して取り組んでもらい、学習者が理解できた好悪の表現を板書した。そして、三度目の「聞き取り」において、食べ物の語彙(名詞)に限定して取り組んでもらった際には、好悪の表現(動詞表現)ごとに語られる食べ物の語彙(名詞)を各自記録してもらった(配付した聞き取り用シートに記入)。ちなみに、一度目、二度目、三度目、それぞれの「聞き取り」については、学習者の状況を確認しながら必要に応じて複数回行った。この段階は個人活動である。

最終段階となる「聞き取り後」では、好悪の表現(動詞表現)と比べて各段に数が増加する食べ物の語彙(名詞)を互いに補い合えるように、先程組んだグループに分かれて、それぞれが聞き取った語彙について話し合ってもらった。その後、グループごとに発表してもらった語彙を板書した後、改めて「聞き取り」を行い、クラス全体で出した意見の確認を行った。そして最後、学んだことの復習および応用を目的に、今回の「聞き取

り」で確認した好悪の表現（動詞表現）や食べ物の語彙（名詞）を用いて、グループごとにそれぞれの食べ物の好悪について話し合ってもらった。

### c) 授業後

以上が実践した授業の概略である。この授業に関してアンケートを実施したところ（出席者 12 名）、「聞き取り前」に実施した復習は概ね効果的という意見が得られた（1 名を除き「役に立った」と回答）。また、「聞き取り」に関しては、食べ物の語彙（名詞）の中で、まだ学習していないながら音声から予想が可能だと判断した語彙の聞き取りが難しかったという意見が複数見られた。ただし、たとえ困難であっても、初めて耳にする語彙を聞き取ることも学習としては必要なことだと考えられる。そこで、今後、同様の授業を実施する際にも「音声から予想が可能なもの」という語彙グループは設定していきたい。しかし、「聞き取り後」の段階で、この語彙グループについては、別途、練習時間を設ける必要があることが分かった。最後に、気になった点は、「聞き取り」に関する学習者の自己評価が全体的に低いことである。つまり、学習者には、理解できたことではなく理解できなかったことを意識する傾向が見受けられた。勿論、自分の未熟な点を反省することは成長にとって重要なことではある。しかし、細部に拘泥することが自己否定につながるのであれば対応を検討する必要があるだろう。アンケートの最後で、このような「聞き取り」の授業への要望を問いかけたところ、学習者全員が肯定的に返答した。そこで、これからも同様の授業を実施していく予定であるが、その際、日常的なコミュニケーションにおいては、まず話題の全体像を把握することが重要であること、そして細部に拘泥して過度に自己評価を下げる必要はないことを実感してもらえるように努めていきたい。

## 2) 文化教育の側面

カナダのケベック州の研修では、いわゆる世界に広がり息づくフランコフォニー（フランス語圏）に触れることができたと言えるだろう。勿論、わずか3週間という短い期間であり、しかも個人という限定されたフィルターを通して得られたことである。ある地域を理解するという観点から言えば、量的にも質的にも不十分なものとしか言いようがないことは明白である。しかし、それでも個人的に貴重な経験であったことは否めない。そこで、現在、沖縄国際大学で担当している4つの授業、具体的には、フランス語初級クラス（フランス語Ⅱ、登録者数 41 名）およびフランス語中級クラス（フランス語Ⅳ、登録者数 15 名）、ヨーロッパに関する講義（ヨーロッパ研究Ⅱ、登録者数 101 名）、そして、初年度教育のゼミ（基礎演習、登録者数 17 名）において、ケベック州に滞在している間に見聞したことや印象に残ったことを紹介した。その文化紹介（15分程度）の主な内容は以下の通りである。

- ・カナダ：人口、面積、首都、公用語
- ・カナダの州：州と準州
- ・ケベック州：人口、面積、州都、公用語
- ・ケベック州の気候と地理

- ・ケベックの歴史
- ・写真による紹介：
  - ・カナダにおける言語表記の差異（英語圏とフランス語圏）
  - ・モントリオールの旧市街（ヨーロッパ風建築）と新市街（近代的な高層ビル）
  - ・モントリオール大学の概観と内観
  - ・ケベック・シティー
  - ・食生活：プティンやベーグル、パンケーキなどの庶民的な日常食やファーストフード店

#### A&W

- ・カナダで用いられているフランス語の特徴

ちなみに、沖縄国際大学では 2013 年から、カナダのブリティッシュ・コロンビア州（カナダの西岸側）に位置するバンクーバーアイランド大学で、夏の文化研修が実施されている。つまり、沖縄国際大学の学生にとって、カナダは滞在の可能性が大きく開かれた国となる。そのことを意識してもらうために、まず、カナダの地図を提示しながらバンクーバーアイランド大学の位置や文化研修について紹介を行った。そして、その後、ケベック州（カナダの東岸側）の位置を確認しながら具体的な説明へと移行した。また、それぞれの授業に合わせて文化紹介の構成には若干の変更を加えた。特に、最後に挙げた項目「カナダで用いられているフランス語の特徴」は、中級フランス語の授業においてのみ紹介を行った。余談だが、いままでフランスに滞在した際、沖縄で親しまれているファーストフード店 A&W を見かけることはなかった。しかし、モントリオールでは、フランス語表示ながらファーストフード店 A&W をしばしば見かけることとなった。それはいわばフランス文化とアメリカ文化の融合の一種の反映と言えるだろう。今回は、ファーストフード店 A&W という沖縄の学生にとって身近なものを取り上げて、モントリオールというフランコフォニー（フランス語圏）の街特有の文化的特徴を紹介できたことが印象深かった。

## おわりに

ケベック州での研修は、フランス文学を専門として学んできた私にとってフランス語教育の知識や経験を高めてくれるものであり、また、フランス以外のフランコフォニー（フランス語圏）との初めての出会いを提供してくれるものであった。しかも、モントリオール、ひいてはケベック州では、フランス文化やアメリカ文化のみならず、様々な文化が互いに影響を及ぼしながら新たな世界を生み出していることを実際に感じる事ができた。ちなみに、そのことを具現化しているのが、ベトナムのサイゴン（現在はホーチミン）で生まれ育ち、10 歳の時にケベック州に移住した作家キム・トゥイー（自伝的小説『リュ』）や、韓国人の両親のもと日本で生まれた後、2 歳からケベック州で暮らしている作家ウーク・チョング（自伝的小説『コリア三部作』）たちの作品だと言えるだろう<sup>7)</sup>。彼らの作品は国際的にも高く評価されているが、このように移民という在り方から生み出された作品は、一種の「多様性の中の統合」の実現として見なすことができる。欧州連合のスローガン

<sup>7)</sup> 以下の資料を参照。Kim Thúy, *Ru*, Montréal: Éditions Libre Expression, 2009. Ook Chung, *La Trilogie coréenne*, Montréal: Éditions du Boréal, 2012. ウェブ資料: ケベック州政府公式サイト「ケベック文学海外 海外進出する本」(閲覧日: 2014 年 1 月 11 日)。ウェブ記事: ケベック州政府公式サイト「ケベックの作家、ウーク・チョング氏来日 大学などで講演」, 2013 年 10 月 20 (閲覧日: 2014 年 1 月 11 日)。



であるだけではなく、どの国においても取り組むべき課題である「多様性の中の統合」について学生たちに考えてもらう契機とするために、今後、こうしたケベックの作家たちの作品を、文化教育の側面から授業に取り入れていきたいと思う。ケベック州での研修は、文学というフィールドにおいても新しい門戸を開いてくれるものであった。

## 引用および参考文献

- 吉澤英樹「協働学習の実践と問題点:2011年度夏季ケベック・スタージュから学んだこと」、*Études didactiques du FLE au Japon*、第21号、2012年、51-58頁
- 土屋良二「2011年ケベック・スタージュ報告」、*Études didactiques du FLE au Japon*、第21号、2012年、59-64頁
- ウェブ書籍：吉島茂、大橋理枝訳編『外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠－』（PDF）、朝日出版社（閲覧日：2013年12月1日）
- 櫻井直子「CEFRの理念とその文脈化」、『複言語教育研究』、第1号、日本大学NU-CEFR研究会、2013年2月、4-22頁
- 武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科編『ヨーロッパ学入門－改訂版－』、朝日出版社、2009年
- ウェブ雑誌：「EU質問コーナー：EUはどのように文化の多様性を維持しているのですか。」、雑誌『ヨーロッパ』、2006年冬号、15頁（閲覧日：2014年1月11日）
- 髭郁彦、川島浩一郎、渡邊淳也『フランス語概論』、駿河台出版社、2010年
- 小畑精和、竹中豊編著『ケベックを知るための54章』、明石書店、「エリア・スタディーズ72」、2009年
- Textes de Christine Ouin, Louise Pratte et Julie Bordeur, Illustrations de Pascal Biet, *J'explore le Québec : mon premier guide de voyage*, 2<sup>e</sup> édition, Montréal : Guides de voyage Ulysse, 2013
- Kim Thúy, *Ru*, Montréal : Éditions Libre Expression, 2009
- Ook Chung, *La Trilogie coréenne*, Montréal : Éditions du Boréal, 2012
- Recueil de textes : «Stage didactique : langue, culture et société québécoises», Montréal : Faculté de l'éducation permanente de l'Université de Montréal, 2013
- 平野千果子『フランス植民地主義の歴史－奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』、人文書院、2002年
- N.バンセル、P.ブランシヤール、F.ヴェルジェス『植民地共和国フランス』、平野千果子、菊池恵介訳、岩波書店、2011年
- 弓削尚子『啓蒙の世紀と文明観』、山川出版社、「世界史リブレット88」、2004年
- ウェブ資料：ケベック州政府公式サイト「ケベック文学海外 海外進出する本」（閲覧日：2014年1月11日）
- ウェブ記事：ケベック州政府公式サイト「ケベックの作家、ワーク・チョング氏来日 大学などで講演」、2013年10月20日（閲覧日：2014年1月11日）
- 日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館「2013年フランス語教育国内

スタージュ募集要項」、2012年11月8日

Gouvernement du Québec, « Bourses offertes aux professeurs de français langue étrangère, Japon et Corée du Sud : Programme de Stage en didactique du français, culture et société québécoises »

## 資料

表1 2013年3月国内研修のプログラム

3月23日(土)	3月24日(日)	3月25日(月)	3月26日(火)
	9:30-10:00 ヨーロッパ言語共通参照枠 について 中野茂、岡見さえ	9:00-12:30 口述および記述の実資料 ピエール＝イヴ・ルー	9:30-10:30 TICEの利用法 國枝孝弘、小松祐子
	10:00-12:00 外国語としてのフランス語 教育のメソッド ピエール＝イヴ・ルー		10:35-12:10 文学テキストに基づいて教 えるためのいくつかの道筋 ピエール＝イヴ・ルー
13:00-14:10 開会式：介入者と参加者の紹 介	13:00-14:30 発音をどう教えるか？ 菊地歌子	14:00-16:00 文法をどう教えるか？ 山根祐佳	12:15-13:05 出版社による教科書の紹介
14:15-14:40 日本のフランス語教育の現 状と「私」 古石篤子	休憩	休憩	昼食
14:40-16:10 生きた言語教育のための 35 の指導原理 ピエール＝イヴ・ルー	14:45-16:45 授業準備(2) クリステル・ル・カルヴェ、 飯田良子	16:15-17:15 模擬授業：準備2 常盤僚子、飯田良子	14:00-17:30 模擬授業：発表 常盤僚子、飯田良子、クリス テル・ル・カルヴェ
休憩			17:30-18:10 模擬授業：模擬授業の総括 常盤僚子、飯田良子
16:25-17:15 模擬授業：授業見学総括 常盤僚子、飯田良子 模擬授業：オリエンテーショ ン 常盤僚子、飯田良子	16:50-18:20 模擬授業：準備1 常盤僚子、飯田良子、鶴澤恵 子	17:15-19:00 授業準備(3)＋模擬授業： 準備3 鶴澤恵子	18:10-19:30 研修の評価と閉会式
17:15-19:15 授業準備(1) クリステル・ル・カルヴェ、 飯田良子	18:30-19:30 講演会 ダニエル・ムール		

※ピエール＝イヴ・ルーとクリステル・ル・カルヴェが担当する授業や模擬授業、講演会はフランス語で実施。

なお当日多少の変更有。

敬称略(原文のフランス語の訳責：上江洲律子)

表2 2013年7-8月国外研修のプログラム：  
教育に関わるアトリエ形式の授業の時間割（ヴィルジニ・ドゥブリ担当）

7月29日（月）	7月30日（火）	7月31日（水）	8月1日（木）	8月2日（金）
・第0課 ・授業運営の仕方について	・聞き取りについて	・実資料について  記述課題（個人課題）についての説明	・実資料についての 実習	・口述による伝達と 音声学

8月5日（月）	8月6日（火）	8月7日（水）	8月8日（木）	8月9日（金）
・語彙について	・読解について	・協働学習と 企画による学習 教育法  口述課題（グループ 課題）についての説 明	・記述文書の作成と 文法  記述課題（個人課 題）の提出	・学習の戦略につい て

8月12日（月）	8月13日（火）	8月14日（水）	8月15日（木）	8月16日（金）
・間文化的な能力に ついて  グループ活動	・第二外国語として のフランス語お よび外国語とし てのフランス語 の教育における 評価 コンピュータ室 での実習	グループ課題の 発表（1）  （3グループによ る模擬授業）	グループ課題の 発表（2）  （3グループによ る模擬授業）	グループ課題に ついての考察

※太字の部分は個人課題とグループ課題に関わる内容。なお当日多少の変更有。

敬称略（原文のフランス語の訳責：上江洲律子）